

和朝

今

昔

物

語

卷之六

自六

增4
775
202



817
208

今答并唱

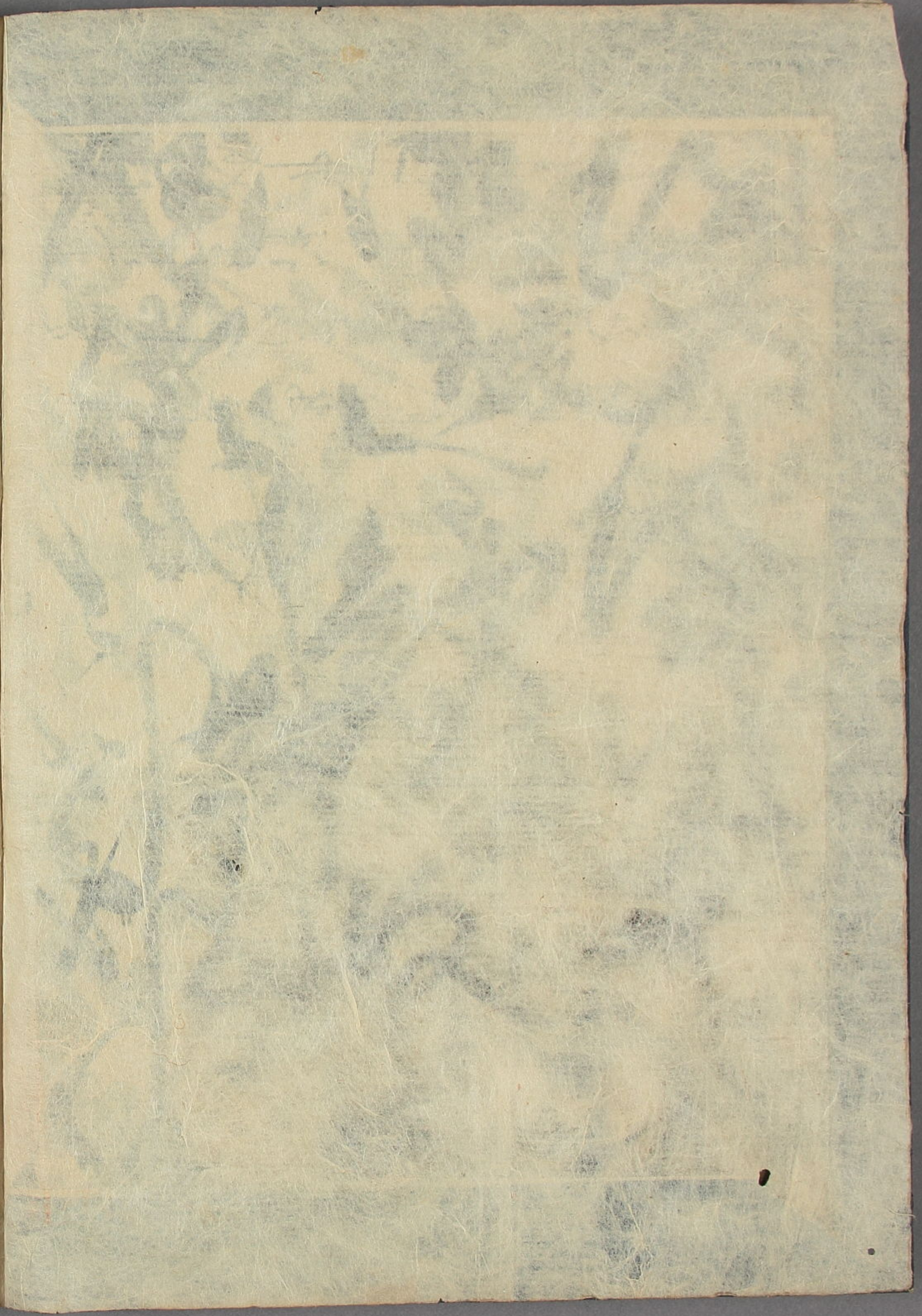
京師書林陳林博



味臆時前卷十五卷

并戰庚壬庚信慕結

平氣大際言氣新國嘯對



門4曾4
775
卷 202

宇治大納言源隆國卿撰

井澤先生考訂纂註

今答日物語

和朝部前編十五卷

京師書林柳枝軒新鐫

考訂今昔物語叙

今昔物語、宇治大納言源隆國卿撰、人皆其貴
元、醍醐帝は皇子西宮た、高光明は孫
く、権大納言俊賢の次男なり。後冷泉
帝に侍り、寵遇を蒙り、人々つて、
し、を好む、あつて、世に傳へ、る、物語
と、成、り、て、い、は、れ、び、き、く、一、高、く、れ、と、せ、り
然、り、あ、り、積、も、り、足、は、り、く、り、以、て、多、く、と、せ、り。



宇治の別業^ろうのびさ。道のつらつら。茶
店^{てん}と海^{うみ}の往来^{ゆきまき}の人とまよひだて。古^{ふる}の物語^{ものがたり}を
せよ。昔^{むかし}て。本朝^{ほんて}の政事^{せいじ}。天皇^{てんわう}と震旦^{しんたん}と。雑誌^{ざっし}
う。家^{いへ}の海^{うみ}の言^{こと}言^{こと}記^きして。俄^{いつぱ}ようこば。あ
冊子^{しやくし}やま。其^{その}け。知^しの今昔^{いまむかし}と。出^いて。あ
らう。く。終^{はつ}と。物語^{ものがたり}の号^{ごう}と。せう。作者^{さくしや}の各
よ。よう。く。又^{また}宇治^{うぢ}物語^{ものがたり}と。留^{とど}ま。う。く。後^{あと}
其^{その}の。い。ま。の。成^{なり}ひ。ら。ひ。ら。成^{なり}宇治^{うぢ}拾遺^{しやくい}と

い。ま。あ。ま。ち。う。め。う。拾遺^{しやくい}の。い。ま。の。採^{あつ}め。う。ま
む。知^しの。い。ま。の。割^わじ。と。あ。ら。う。を。編^{へん}輯^{しやく}よ
り。この。く。ね。百^{ひゃく}年^{ねん}。よ。及^{およ}び。あ。ま。の。騰^{とう}寫^{しやく}志^しと
く。う。さ。なる。て。文^{ぶん}字^じ脱^{だつ}落^{らく}。一^{いっ}報^{ほう}意^いの。う。ら
む。ま。の。多^{おほ}く。舊^{ふる}記^きの。あ。の。ま。の。な。れ。け。ら
と。れ。と。款^{くわん}ご。う。ま。や。京^{きやう}師^し書^{しよ}材^{さい}柳^{りゆう}枝^し軒^{けん}予^よ
ふ。は。あ。ら。う。ま。の。う。ま。ひ。と。成^{なり}ぬ。る。と。又^{また}い。せ
の。ま。の。終^{はつ}を。た。り。せ。実^{じつ}成^{なり}り。の。く。求^{もと}め。紙^し

こゝにむすのりつぎ思意とくくくありて
切くれも瓜也くくく差謬なるん
と瓜

享保五年五月朔日

肥後隈亭

丹澤節長秀

考訂今昔物語凡例

- 一 本書りや三十卷中よりつと三十卷より其六十卷ハ日本部二十卷、天竺部十五卷、震旦部十五卷まで六十六卷なり
- 一 本書編輯年久しく謄写をばびくふむびて文字はあやまりあるも脱して叙意りちがはれりあり、あやまりありく舊記實録と接てこれを正し、徒に誤を加つて事證と寸闕と補はれり、その舊文と存す
- 一 本書み載ふところ其人世系名諱、舊記實録よりくくありのぬは其下に記して観閱したるなり
- 一 本書中のより下の人出自とあやまるあり、住地や和名不とりく藤原忠房の子とある類也一人とりりく二人とするあり、其系を寛遠がさくひなり二人ともく一人とするあり、按中納言致忠土御門中納言の

竺震且雜語。悉皆抄之。號今昔物語。或曰宇治亞相物語。而後輯其所漏者。號之宇治拾遺物語。實可謂修史之資也。承保元年正月辭仕。同四年七月九日卒。自美保四年。至享保五年。六百四十二年歟。

隆俊

中納言

俊實

隆綱

左中將

俊明

大納言

能俊

今昔物語全部六十卷

内 日本部三十卷目錄

○ 日本部 三十卷
 ○ 天竺部 十五卷
 ○ 震旦部 十五卷

○ 卷一 世俗傳

○ 卷二 世俗傳

○ 卷三 世俗傳

○ 卷四 世俗傳

○ 卷五 世俗傳

○ 卷六 世俗傳

○ 卷七 世俗傳

○ 卷八 世俗傳

○ 卷九 世俗傳

○ 卷十 世俗傳

○ 卷十 世俗傳

○ 卷十二 世俗傳

○ 卷十三 恠異傳

○ 卷十四 恠異傳

○ 卷十五 恠異傳

右十五卷 享保五年版行

○ 卷十六 恠行傳

○ 卷十七 恠行傳

- 卷十八 惡行傳
- 卷十九 惡行傳
- 卷二十 宿報傳
- 卷二十一 宿報傳
- 卷二十二 宿報傳
- 卷二十三 宿報傳
- 卷二十四 佛法傳
- 卷二十五 佛法傳
- 卷二十六 佛法傳
- 卷二十七 佛法傳
- 卷二十八 雜事傳
- 卷二十九 雜事傳
- 卷三十 雜事傳
- 卷三十一 雜事傳

右十五卷 出版

○自卷三十一至四十五 天竺部
 ○自卷四十六至六十 震旦部
 右三十卷可追版
 都合三國部全部六十卷可逐年而將行之

今昔物語部 一目錄

- 一 北邊大江長谷雄中約言語
- 二 百滝川成子飛彈工匠挑語
- 三 其石擲寬蓮色其石擲女語
- 四 於凡上初殿返男針返女語
- 五 行典索索治病語
- 六 女行醫作家治瘡述語
- 七 震旦僧長身未北胡為醫作語
- 八 忠明治值奄者語
- 九 因磨右大臣家馬語

今昔物語 倭部一

大正二年一月廿日寄
中村権雄氏贈



一 北邊大臣長谷雄中納言語

今むらう小色大臣と申人たけりける名と信と

三代實録曰左大臣從二位源朝臣信者嵯峨太上天皇之子源

門北西洞院西左大臣源信公家

まみれひるふよらう小色大臣ははれありらう

はのりやんぶあけりけるはれありらう

のたそひるたけりけるはれありらう

りく弾きりていりけるはれありらう

暁ぐらりていりけるはれありらう

て早やひれんりりけるはれありらう

乃故の隔子のと物ひるやうりけるはれありらう

ありんとえりるひらうりけるはれありらう

其童子成れば、みくよるこびりり

文徳實録曰川成令或人喚
從者或人辭以未見形容川

成則取一紙圖其形體或人
遂驗得之其機妙類如此

そのはこれと同く下ふとひりた半小

武楽院とほはりしものありは工通川成と申して

各の意成れば、世もさへあると見工通川成とい

く、狐あま二間四面の堂成はらぬおしして見れば又辨ふ

信書ては、そめんとし、門成やうて工通の家よ約てらるふ

下りげありふされ雲あり四面北戸皆あり工通堂より

かく内成は、海へついで川成縁より上りて南の戸よりいん

すれが、其たりしと聞おし、ろきせぐうて物のそよりいんすれ

べその戸は、こ同く、南の戸の同ぬ北の戸よりいんすれと

其戸の同て、物のそ、門より系れ、たあてつんとすれが、そ

同て、その戸開よりいんあま、こひつんとすらふ、開つ開つ

入半とゆやうのと見れば、川成神とて、さひて、うぬそ、あち

日ごろと後、川成、光澤、工通、許より、ひや、やう、つ、あ、ま、さ、

ゆせ、ん、せ、ま、さ、さ、ま、あ、り、と、工通、これ、い、定め、て、致、と、は、う

う、ん、ず、ら、あ、り、と、さ、ひ、て、ゆ、づ、ら、成、さ、び、く、神、ん、ご、ら、ま、う、い、工

通、川、成、が、家、よ、約、て、見、さ、る、由、成、つ、ひ、入、ら、ふ、い、ち、ま、い、り、と

い、ろ、う、積、り、ま、さ、ら、ひ、て、廊、の、あ、る、建、た、を、引、あ、け、た、内、よ、な

り、る、人、は、黒、い、膝、を、う、ら、う、ら、川、居、う、ら、さ、た、半、あ、え、ご、

工通、西、の、ひ、ろ、け、れ、い、髪、を、こ、れ、う、て、う、ん、と、は、門、成、内、よ、あ、て

は、お、ま、さ、て、さ、う、さ、う、さ、う、か、工通、の、ま、な、か、ま、お、と、さ、ひ

と、を、さ、ま、ら、ふ、川、成、造、た、り、教、を、う、て、お、し、て、こ、り、あ、り

う、れ、い、ま、ま、あ、れ、と、い、は、な、つ、こ、ま、り、て、ま、い、ら、ま、あ、ら、う、て

障、子、小、お、人、の、形、を、書、く、る、あり、あ、る、堂、を、て、ほ、れ、れ、ら、工

通、の、物、を、う、ら、ま、い、し、の、ま、な、う、う、て、徳、人、を、あ、ら、う、と、か、ん

く、ら、く、は、こ、え、う、ら、う、な、り

今昔物語 倭部二

一 慈岳川人被追地神話

慈岳當作滋岳江談抄曰滋岳川人文德實錄曰齊衡元年九月丁亥乃枝直川人賜姓滋岳朝臣

按天安二年八月廿七日崩

今心くみみ代文徳天皇とせしめしむるふ
諸陵と云んがふ大納言安倍朝臣安仁のりる人
をみりてそのとみみたふとて人みみ具
みゆきり其時慈岳朝臣門人やみ法陽作あり
道よばまきしふまらちびりたのありそし
つて諸陵のこころを點し
三代實錄曰外從五位下行陰陽權助兼陰陽博士滋岳朝臣川人外從五位下行陰陽助兼權博
士益朝臣名高又曰至山城國葛野郡田邑卿真原國定山陵之地
末百よりぬまはるるりふ深草の
小のれとけり川人大納言のりたちく馬瓜うちよきと
よのいそとみみり氣取んとぬ大納言たぐ心付てこれと
同くひそふふらハ羊ごらほくくまのけり子とみ道よ

そとにみちをさぐりてあつては、
とあるる日京よりうきよきけさびき人なることとて、
のぶら下りたりあり、
正宣のまみれが、
えりありとありひくろひまき、
書をみしすことと、
ろまんらへ、
同よき、
ん、
ぼり、
つ、
て、
び、
非、

三 頌 茂 忠 行 傳 道 子 保 憲 語

とにむし頌茂忠行
丹波權頭從五位下。出羽介從五位下。江人子。系圖曰吉備誓不黑誓諸雄人。唐江人。忠行。〇姓氏錄曰。賀茂

命之後也。忠行其裔也。
れとやんとれき者をも用らるる事ある日、
たれとてのそ後とせさる下あり、
よ其子保憲陰陽天文傳、
ゆきそ被とす、
そりぬまことば、
保憲父よ向ひく、
そりしげ、
くひて、

此の仲しを海賊とあひくね乃物とらひしをこれあつた新
しる者ましくころされしをきく船中とて下人と海とあひく
命とあひくし陸はあつたを流したりそのおし智徳ありて
何人ぞと問はれ船中とて問はりのつらうはけし
昨日海賊とあひく船の物皆らまきんせりて我等ぞり
希者の命せてゆりありと著る智徳るまきんせりて
ま津これぬすくく去し奴とわめせむとて船中をふ
れまふりといひりともいふもあつたはれしゆんぬの
りしと不智徳とあひの何時ゆりぞとて船中とて
りしと著るそのしは智徳小船と著る船中と具しと仲は漕
りしと著るそのしは船中と著る海と著る字と書経とまきん
あつて後人まきんやまきん四六日ゆりしとて船中と
て七日はあつたりゆりしと著る船中と著る船中と著る
ひそり人とも兵取と著る船中と著る船中と著る酒と著る

酔らるものやうとていふもせざりしとて足件たての海賊と
まの物一つもせびくともなれ船中のしゆゆをくはしこ
くして船中と著るせりしと著るの老と海賊とあひく
あつたと著るしと著る海賊とあひくし今も後
いぬとあつてうかあつたとなれいぬはを法
あつたといひて逃まがしりし足ひくは智徳が陰陽の術
とあつて海賊とけりしと著るなりと著る船中と著る
めくおそりしと著る奴と著るやせりしと著る
と著るこれと著る此事見守守治拾遺物語故畧と著る
いぬと著る船中と著るいぬと著るいぬと著る
六 人妻成其靈除其害陰陽呪詔
今むしある老と著る妻と著るしと著る妻と著る
かげと著るしと著るおのちのしと著る病と著る
名と著るしと著る其か父母と著るしと著る

然とてくくすつまもかゝ家のうちよかんういふ
故やええぬ内七段もあらぬと常はかゝるがらう隣
家の人物のひまりののそらんてれうと半くざりあり死て
より後家の用は光りて時を隣の家を建ててげゆよ
ひりり其まこれとびてうまひ死し方とのまれば
松とよりこまをいふもいふの類とのぞれを
ある法陽寺のりんと約ていふと語らぬありうは法陽
師いとい半一三ためて大半なりうふあれどもかめ
とままばゆんあうびてゆいさいめくあう一三半
ありう後とゆて念とりと毎日たて法陽師の死
人此ありまを具してゆさぬ胃の外をうたふ
毛髪立てれう一きよゆてうの衣はしんりあえ
ありてこれども法陽師自身をゆをてあうくゆえん
うまげも死人の骸もれらぬ骨内もつうて川う法陽

竹野と死骸の背馬一葉うらうにのそく死人の骸とまよ
ゆきひんをゆめくもあうてあれとて物とまよ
うけてしき家よあうまてかてあうゆてあう一ま
あれを死と念をていひるく法陽師は出てまぬ胃を
せんうまけしあうあうあうあうあうあうあうあう
てて病うりあうあうあうあうあうあうあうあう
い死人あうあうあうあうあうあうあうあうあう
まといひてけうてあぬ胃の法陽師がてうまた骸を
まてびてあうあう死人を仰てあうあうあうあう
やうあうあうあうあうあうあうあうあうあうあう
教のまて骸とあうあうあうあうあうあうあうあう
死人骸とまてあうあうあうあうあうあうあうあう
今あうあうあうあうあうあうあうあうあうあう
胃あうあうあうあうあうあうあうあうあうあう

不^レ_レ^レの^レで^レ後^レ國^レよ^レせ^レれ^レら^レう^レと^レ言^レ合^レけ^レら^レう^レ業^レ
化^レ細^レ々^レと^レら^レふ^レは^レ是^レ也^レ清^レ約^レ卒^レね^レ延^レ政^レの^レ人^レあ^レれ^レも^レ
各^レ破^レら^レふ^レは^レな^レら^レう^レと^レ言^レ三^レ言^レ卒^レ相^レと^レら^レふ^レは^レ是^レも^レ免^レ
治^レせ^レら^レる^レ也^レ

今昔物語二

今昔物語部三目錄

○世俗傳

- 一 短衣沙屏凡多勢却息不讀和詩語
- 二 敦忠中納言南殿攝次和行語
- 三 公使納言淡屏凡和行語日輪川家淡和行語
- 四 友不實方切居於法奥國讀和行語
- 五 筑前守源道海家人妻寂刺淡和歌語
- 六 侍坊行息所幼時淡和行語
- 七 元良親王淡和行語
- 八 大江匡衡贈實方和行語

月と修らまふ。うらなひの如くして平腹の娘をよはる
ふまふれてなんぢをわや七条色をして生れたりとさけは
鹿津ありとて二月の初午に日輪新へあつとんとて大和より
京への不せく其日の字をく物行の社をゆきてをる
うらうらと下らうのぶねをさうんとやまぐさむとむひて是
物新へゆりて仰りうかひ大和の女子よりあひたりおねえ
とこれば年の十七八むらうとさうとく氣多うきまけようく
しきとさうさうひあー星の下よりよくねがひ者の人よは
かしくあぬそれよりいせ教つさそいでらうとておね目もえ
心とさう死て小舎人をとびては人のみん不ゆりえんく
それと流りうらねがきりしちまきちてゆくを流る老とけ
しきをみてあのもいれあつたあやしく具へあつてさうさうな
らんとしつをさうさうさうてかこさたをゆはらわぬ敬の入と
くらん石きうさうさうてまねよの作ありとつて供の人といく

たうゆえんはさうさうたのむ置裏とばうりやせといひうらな
うてうのよとつくとやぬおねわらうつねがくてあげさむひ
りうねと女は約とれけきばあぬさうさうさうりしにわねの家
うをんぞれと字の情士ありりうら物ぐるの次よおね
裏といふといつこのあやと問はれ情士の裏といふ大和よ
ある地下といふところとさうさうさうにゆたといひねがわ
これをさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
ゆらう上のさうさうさうさうの人はさうさうさうさうさうさ
ゆらわとさうさうさうさうて小舎人を侍一人舎人男一人具
しとひさうさうさうさうさう地下といふ石をさうさうさうさ
いつとさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ
あり別地とさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ
とさうさうさうさうさうの締着とて美女の侍ありしやさうの家
此内よりゆらわら紙とてさうさうさうさうさうさうさうさうさ

このゆゑにさうしてはむくまのびてまゝつゝはぬりたりとつゝま
隘力二人小谷人妻二人馬今人むらり少くゆつくとみだりゆつて
中目とふ所日午とせむく籠屋右宰府よをりつれて京
まらうとあらはにぬらうと老女よびとてかくとさうりぬ
あゝれよあひく大式を妻うかくとあゝれよあひく
梨久あうおねな瓜世の中はせをく死をへさうにぬれんが
今一頁新ぬきんとあひくさうとさうとよみせまばうの女子か
くまぞあひひのひる半のうまーさうとよみて今よりぬ
おねともかくとよびくそ其曉女瓜馬よらち茶せて京つ
つとんとあけとよいゆつてゆつとよいゆれだおねさへ
ぞとくのあうらうおしとま二月むらりぬらうふおのてさう
風のうさきえがさけきどもぬらぬのうとよむくそさうい
そさくゆ着るとつらうあひくゆらうよ日書ふよとよび
ておやうはりてさうと成きれバ宿ぶとさあもあくてみ

れりふとゆくとゆくとあてゆくとよびとて今おねとあへてか
まもくいせつが月も食しとらうまらつふおとておとさう
ゆつとあまのあはれなると紙きとよまらうてゆらうとさ
間がゆくとあうらうあうとあうとゆれらうとさうとさ
りぬれんがあうとあひて徳の老とあの間紙つとて居る紙
よびくくさばあうとあひのくゆてふらうとあねいあ
あどろまてゆくとさうとあひるさうとあひるさうとあひる
さうとさうとあねの秋の神紙かけらうとあひるさうとあひる
うらゆくとあねのさうとさうと草鞋のさうとさうとあひる
きとあひるさうとさうとあひるさうとあひるさうとあひる
あひるさうとさうとあひるさうとあひるさうとあひる
りかくて二日むらりあてかあやれ大式くとあてあひる
あひるさうとさうとあひるさうとあひるさうとあひる
あひるさうとさうとあひるさうとあひるさうとあひる

あぢの母とておねのいとこもいふさかたあくと
やうくあつてさういふは使あやうく流ゆふとも文の中
やういふわりの人かたつともゆんすれども流まよひておねも
あぢらひは使いむれくくうたりかゝ家とくはわよあげ
き死しけりやうん 諸つともさるる也

四 山城國貞女譜

そいつく山城のいづる人女子ひとりやふ解と合せ
うりうりふ其むこ死れバ親又他方男はあひをせしす
みむすめすて母もいひるは我男は具してあふさ宿世
多勢ゆいふ糸の男不死してやあゆ 四男は具はゆ
き初あれは二死れは死るるめきとひ又男はゆせと
己た身のみくぬあふバ又死るるあふはは津やめらり
づとつふ母れとすて大うおどろき又うかりけむを
又けくちて数年までくむりりあふられありけ

そのちハ、うりてうせあうすやとひくははあふん
とれむめ父母、うりてうりては家、巢はけうてみ
うじ慈あり雄慈と相具さうあろくは雄慈はけうてころ
して雌慈はうりてはせそくれうへ明や年其雌慈
他の雄慈と具してあうさうんこれう後とえくつは
又とばあをそのへ禽獸さうまとうあひつとバ他のまを
教らるるやう、いんやんはれうの首ぐとふ又母け
うららりもさう其家、巢とけうて子とうさうさう慈と
雄慈とさうして雌慈はあひらうあさあふはゆとて
りかしてあつる年の長慈はゆ其雌の雄慈と具をく
頭とあつてをあづりあううらうが巢はつらうてふはうむら
あうしてはれはえさう父母足とみくゆとふさう半
あうとひくむすあまとあはをさうその心をぐくと
ゆりたりかて後むすあかくそよんら

かきつらひありれもみよつてあすうきういんまきぬ物紙
透日地乃推多くしくふはまのいもあまうんそあそ
れあれんとして夫死して又後の夫とゆうくうハ鳥まこら
くに申せらうとるんくうはくえんるる也

今昔物語四

今昔物語諸部五目錄

○世俗傳

一 将門純友謀叛伏誅諸

今昔物語 傳部五

○世俗傳

一 将門純友謀叛伏誅語

此段本文乱脱。粗語不取。以故参考。将門記等諸實録改記如左。又義与奉書大異者。夫思之。

今ハむろく六十一代朱雀院沙宇新平四年に山陽南海の海賊おこつて國民とあややすふらぐ。官兵とほつりてつめとらふとく。首とされたり。同

六年六月南海の張平友純友伊豫椽從五位下。良範男。とらふ者

其黨はあつめ。伊予國日振守下將波の形と集め

海上は風の宿物とらひんと。これよみて南海と志す。

つぎに純友の長男と伊豫守從四位下。とつらひ

いぬにともりて。萬民とあつめ。大海賊とも志す。

くまうまうりり。同年七月下旬。純友と相とりあひて

上洛するのころ。下総國仁人相馬小次郎平将門滝口丸良將男。

と在京を以て将門の先祖の桓武天皇より代高見王の一
男高澄王に六人の子あり一男良長と云ふ後醍醐
帝とありて法守府將軍より貞盛が父あり次男
良長將門と云ふ法守府將軍より是將門の父あり之
男は上総守平良兼と云ふ四男と平良鑑と云ふ法守
府將軍より五男以村多房平良文と云ふ六男以有
子六郎平良持と云ふ一族をこぼくして繁昌なり貞
盛と將門は従兄弟なり貞盛より一子ひさし將門
の父ありて庶子なりなりと云ふ叛逆の企てありて
よりて討てしめられし時とゆひあり日貞盛武
平親王の仁知方の館ありて將門も後者なり人と
異しく親王の御方なりと云ふなり貞盛親
王よりて將門を以て將門より一率以具せり依
りて將門と云ふを以て得てなりと云ふ親王

子の政と云ふ貞盛がいとくらの見地日なりて大率と云ふ
して皇命よりと云ふなりと云ふなり貞盛が
十九日將門純友五人以藤山よのなり平本城と見たり
多しなりと云ふ送りのと云ふなりて平本城と見たり
いと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
と云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
孝二年十一月將門関東に亂と云ふなり
將門同大華原四郎將門同五郎將門為同六郎將門
以下の一族都々相りて云々
常陸大掾平國香と討殺して一公以押依と云ふなり
ておと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
月系と云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
瓜がしと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
れなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
いなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
これなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
くのなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
ありと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり

従四位下
村田男

ひらりも其罪をれどくろくこりふ一説曰與世公同よりかして入都也其國の郡司例ありて

将門にげりて田舎軍兵と相俵それより

下仰國は貢入るば國司一説國司右大臣藤原恒統トアリ軍と率して老

ぼくふ國司皆の案内者るれば要害よくつておそれる

よの案内孤をどりぬるもひくちひて利と失ふ

ありしは將門に氏人とかつてひくちの族親玉司の

成敗軍士の圓腹までくりくりおびて好ありぬ軍將と

三子小つてく一子の旗取ぬきく山嶽まかく一子將

門還兵取をぐうてひそくし本陣をきて跡取の表は中

依一子は本陣よのうを於軍とあましくあふぬれ腹

がうりしはむじ國司をえとまぐらやまは軍人取り

將門が兵取ひきくのぬくろくしと玉司ははく國司を

とすておびるるははえよのつくりそやとて何のそ

かともくしるるものもろあへぞ備えんごとくえと進

二十餘町よなく將門が兵取のたは進軍らわつ故とろ高

くやりてうして軍士孤はつりて敵の陣地よ火取をの

玉司陣地の放火をえくし方の中ふ及たの表ありて敵

火をろかちあやむしあしたの表の中より將門軍とゆ

とちりてあつてさすてみるり玉司をえとえてきぐれ

ぬと本くどるひ懐とさぐてくろやぐんとすりし

しめ本中より一子の内縁はととく校合よ入

らんと玉司の傍も二子小つてく相とるあれどもお

わが軍士と進く二十餘町をく司息まれば氣つま

しあふりるは穴あつてくし進きく相馬踏大

ぐしとろくく貝澤とあし玉司のうろはたさ

國司之方の款まかこゆきく途と失ひうろく老ふを去

玉司希有してみげくおれ門下總玉司と進くしとま

習ひしと他友の修多よありしと辨記しれりが今年との
ゆゑ多しと東西一度よありて天下の強勅とあり
口年二月将門純友討よしと参議右衛門督友原光文と
征夷大将軍也一書曰宇治民郡卿忠文は退討の宣とありしを略と
差しり此宣方と抄著と把府と立てまとい一節日を楊
東國とありしは之并刑部卿友原光宗位源経基家代副将軍
之に相志とふ人くは太京亮友原国幹大監北平清基教
佐原就国等因東むりり又小野好古後二位大納言の公材男友原
廣孝大亮春實等以將軍とて兵社二百餘艘とひ
そめて伊予國へ後白といたれ小野好古清子命歸また
くりりり新よ

年と経くあひるんれ路いゆさののらや金成れ
實に下卿押領は依友友原秀郷とよとのありかま
大藏冠謙之公よは八代を以て源村雅が子なりと云ふ人よ
あえ友原のられ上よありしがなりりかくねね門と回ると

於家とありあき日本と回んにうんとありし將門が籍よゆ
まて野向し其解とあり物よ其志とありざりゆめまら
ま化ん以統し下卿國みくうて常陸掾平貞盛若名は
上平を
且談話を貞盛の父國香とわつとせとろの誓懐
教とありけりありれば大と括びて曰んし二月初日貞盛
秀郷此の法奥下卿の誓とありし一万余人下
卿よまいつりぬ日とてふ英盛よ乃と間明日將門が源
行をせて河へに張定して馬の鞍とありし物同く候
身はね門とて同去ははらうと故源とありしひとせむり
と款弓改とありし若原將門とありしと小野兵衛千
貝と稱しりしを四方の林中ありし山の志とありし
至今身は下卿守われ曰大若原上卿今若年等よ
千餘人とありしと款の門て切らとて源村雅が子なり
人夫とありけり二間中よりゆきあふありきとありし

りつて墨壁のびくく築き其あふ小只瓜あり馳門自在
くくふろのありあるは軍士百餘人とりき守らしめ
將門の精兵二子餘人といひきわく和河を過ぎ又なを都
合四千餘人相馬の越浪をまら居りりきでふ子の下越
將門が兵二千餘人よせて款のありを居るを家小大瓜
とありありて入款一万九千餘人をつらあるを家
つとつて常徳とにくと寝ちち入款をさふまりて
火とつてあせばあしてこらだておさるすく述くゆれも
負威秀卿等の氣を正に拒み踏ぐり家あは始より
林中にいくく一帯り難人お放火瓜んく貝金瓜し因
瓜あげやれい百千の雷の一夜ふららるるくく歩千
万とつてまぐく一死とすて款兵くく一死とすてあき
さいたくしてま瓜すく又とすくば世ける款の後とに
いふ將門が兵どもありとあづめく相まらくくさくし

道くわくさくさくもあくばあくとより款の進くけは後
切り落つり泳がよとくれとくろと墨のくげよりつめ
川はめ射らる小あはも款ありとくふれとあま四角八方に
あげちるあま將希ありして河にくく物具瓜捨る事と
もろくあくばいとれ將門が軍士等の負威護杖等が東と
とらえたり動をえとすてやが死とくくまぐくと下か
しけとくもい中取らるる茶にしてくく兵士等がく先は被
れたり動を負威がまは衣服とあてて一首のやとそめ
とほくも風のあたり小丸れでくふ板もあれる花のやとを
いせどり飯やうとくかへしけりりくろのち將門つひ
りく今宵の和河は利とゆくとくくも款さゆてはれは
款ハ大智方ハ小智とて入かせる生兵あり廣場の合戦ハ
はやくくく海とく方ハ士卒の氣とゆくとくあはは怪く
軍とくくして下徳よつてとて要害にうつて愛小意ト氣と

は第一筋小...
つて将門が首...
百九十七人...
少尉下...
安房守...
つり坂東...
接...
叙...
同...
幕門...
坂東...
向...
つりが河...
坂上...
小...
一...
来...
長...
宿...
一...
小...
東...
母...
内...
坊...
里...

つりが河...
坂上...
小...
一...
来...
長...
宿...
一...
小...
東...
母...
内...
坊...
里...

曰。臨時、祭平將門、乱逆、報賽也。○一書曰、依時の祭、成り、九月、天変、丙午、四月、
廿七日、有り、そのと、紀乃、依、八、捕、守、高、元、胡、辰、等、人、亦、人、あり、十、人、なり、
紀、費、之、か、誤、み、弁、み、ね、も、切、ひ、ま、ま、も、
若、口、そ、る、は、あ、ゆ、未、を、く、以、之、ま、る、ん、
乃、兵、礼、志、づ、ま、る、故、り、と、あ、ん、さ、り、傳、へ、ら、る、也、

今昔物語五

